

卷頭言

柴田 元幸

この論集は、全部で82本の論文・研究ノート・エッセイ・小説・翻訳・講演録から成っている。独自のルートでいただいた原稿も何本かあるが、大半は、昨年の夏、「現代文芸論研究室の論集『れにくさ』で、柴田の退職を記念(?)して、北アメリカ特集号を出します。原稿をお寄せいただけないでしょうか。北アメリカに関係があっても、なくても、構いません」という依頼に応じて書かれたものである。依頼した対象は、研究室の同僚(非常勤の方々を含む)、文学部の現・元同僚、現・元大学院生が中心である。

当方の予想としては、北米に関係していてもいなくても可、とゆるくお願いすれば、北米の文化を専門としない方でも、じゃあいい機会だからアメリカに絡んだ話を書いてみようか、とか、じゃあいい機会だから自分の専門をアメリカ文化関係者に知ってもらおう、とか、北米の専門家が、じゃあいい機会だから気合いを入れてアメリカの〇〇について一本書こう、とか、じゃあいい機会だからたまには北米に関係ないことを書いてみようか、と、ばらばらなことを皆さんが考えてくださるのでは、と踏んだのである。正直な話、全部がぜんぶ北米ばなしでは、息が詰まる。適当にばらけてくれれば、というのがこちらの期待であった。そしてこの期待は外れなかった。以下に収められた文章は、当然北アメリカの文化をめぐるものが一番多いが、それ以外の地域とアメリカとをつなげて論じたものも少なくないし、また北米とはとりあえず無関係なものもある。その多種多様さが、地域・言語を超えて文学・文化を考えることを標榜する当研究室の論集には、ひとまずふさわしいものとなったのでないかと思う。

ただし、ひとまずという限定は外せない。というのも、現代文芸論研究室は、ただ違ったものを並べればいい、と唱えているわけではない。地域も時代も言語も違うものをつなげてまっとうな「論」を築くためには、何かきちんとした方法・原理が必要である。この論集のように、特にこれといった原則もなしに、「いちおう北米特集」とだけ言っているんなものが雑多に並んでいる、というのは、したがって、研究室の姿勢の反映というよりは、とにかくいろんなものが幕の内弁当的に並んでいることを好む編者の性癖の反映と考

えていただいた方がよい。

それで、こう頼めば適当にばらけたものになるだろう、という予想は当たったわけだが、もうひとつ、こっちは外れた予想がある。何しろ 80 人以上の方々が執筆を引き受けてくれたわけであり、その一本一本を読むことは悦びでも、限られた時間のなかでそれだけの原稿を一気に読むのは、けっこう大変だろうと予想していた。まあ退職前の最後の大きな「おつとめ」としては悪くない、がんばろう、くらいに考えていたのである。

ところが、到着しはじめた原稿を読みにかかったら、これが、ほとんど例外なく、面白いのである。書き手一人ひとりが、それぞれ気合いを入れて、力のこもった文章を書いている。何本も続けて読む時間を持てた日は、読み応えある原稿に校正の赤を入れながら、ほとんど至福に近い気分を味わった。退職記念号の編集がこんなに楽しいなら何回も退職したい、と思ったほどである。こうして論集をまとめるなか、自分がいかに優秀な学生と同僚に恵まれてきたかを何度もつくづく実感した。素晴らしい原稿を書いてくださった執筆者の皆さんにお礼を申し上げる。

80 点を超える文章を、どう並べるかについては、少し考えた。これまでの『れにくさ』では、基本的に、論じられている対象の時代順に、論文・研究ノート・エッセイ等に分けて並べる、という方針をとってきたが、今回のように種々雑多な文章の集まりには、それも似合わない。それで、内容で区分するようなことはいっさいせず、すべての文章を、なんらかの機械的原理によって並べようと考えた。普通なら名前のあいうえお順、またはアルファベット順ということになるのだろうが、それだといつもとと同じ人間が始めに来ていつもとと同じ人間が終わりに来てしまい、つまらない。そこで、〈いろはにほへと順〉で行くことにした（ただし、当方の研究ノートのみ、いろは順を無視して、ちょうど真ん中に入れさせていただいた——こうすると、上巻で巻頭言、中で研究ノート、下で業績一覧、と、全巻に参加できるので）。論文・エッセイ等の「ジャンル」も明記しないことを考えたが、執筆者が業績リストを作ったりする際などに不便だろうから、これだけは個々に記した。

退職といっても、早期退職という中途半端な形であり、院生の指導などは（向こうが嫌だと言わなければ）続けるし、「本郷を去る」というような感慨は特にないのだが、これまで一緒にいろんな仕事をし、刺激しあってきた研究室の現・元同僚の、（いろはにほへと順）沼野充義、加藤有子、野谷文昭、テッド・グーセン、柳原孝敦、島袋里美、毛利公美各氏に対する感謝の念は、退職の日が近づいてくるなか、募る一方である。皆さん、本当にありがとうございました。

そしてこの『れにくさ』第5号をまとめるにあたっては、今井亮一、坪野圭介、浅羽麗の編集チームが、この上なく能率的かつ情熱的に編集作業を進めてくれた。これだけの量の論集をこんなにすんなりまとめられたのは奇跡に近い。三人にはあつくお礼を申し上げる。また、表紙をデザインしてくれた島袋さん、原稿の最終点検に参加してくれた学生諸君にも感謝する。

研究室の紀要・論集というものは、図書館の奥の棚で埃をかぶっているもの、というイメージが時にあったりもするが、この論集は、読まれることを望んでいる。多くの方が、刺激を受けてくださいますように。

最後の最後に：これまで柴田の授業を受講してくれた、すべての学生諸君に感謝する。どうもありがとう。